



令和7年度
第35回島根県雲南市

永井隆 平和賞

| 入 | 賞 | 作 | 品 | 集 |

島根県雲南市教育委員会

目次

Contents

小学生低学年の部

最優秀賞 わたしにとつての平和

優秀賞 心にとどく

佳作 ぼくが今できること

佳作 わたしにできること

島根県・雲南市立三刀屋小学校

愛媛県・愛媛大学
教育学部附属小学校

島根県・雲南市立三刀屋小学校

島根県・雲南市立鍋山小学校

福留沙依
ふくどめさよ

若狭早
わかさそう

岡田琉位
おかだるい

飯塚陽菜
いづかひな

小学生高学年の部

最優秀賞 青空を見上げて

優秀賞 ぼくの責任

佳作 ふうちゃん

東京都・星美学園小学校

島根県・雲南市立田井小学校

島根県・雲南市立大東小学校

浦野恵奈
うらのえな

堀江将輝
ほりえまさき

米原あさひ
よねはらあさひ

中学生の部

最優秀賞 好きなことのできる幸せ

優秀賞 語り継げ、青の記憶。

佳作 平和への架け橋

佳作 Tくんに出会って変わった心

沖縄県・糸満市立兼城中学校

島根県・島根大学教育学部附属
義務教育学校

沖縄県・糸満市立三和中学校

島根県・島根大学教育学部附属
義務教育学校

村島心月
むらしまこころつき

藤原和奏
ふじはらわかな

千葉結莉
ちのばゆいり

高倉未羽
たかくらみわ

高校生の部

最優秀賞 証

優秀賞 問い続けた先に

佳作 命どう宝。

佳作 ちかいのことば

佳作 思いをツナゲ

佳作 三年の無関心

東京都・東京大学教育学部附属
中等教育学校

滋賀県・ヴォーリズ学園
近江兄弟社高等学校

山梨県・山梨県立甲府第一高等学校

沖縄県・沖縄県立那覇高等学校

島根県・島根県立出雲高等学校

青森県・青森山田高等学校
広域通信制課程

黒木大誠

小西琉偉

田村祐希

安慶田翔子

亀尾美月

千田立煌

一般の部

最優秀賞 叔父の長袖

優秀賞 誤解がつくる壁、理解をひらく窓

佳作 一分間の黙とう

佳作 蟬の季節

兵庫県

宮城県

島根県

京都府

長谷川勝士

何琦璠

小村紀江

永濱美智子

作品集の作成にあたり、明らかな誤字・脱字以外は原文のまま編集を行っています。

最優秀賞

わたしにとつての平和

島根県雲南市立三万屋小学校三年

福^{ふく}留^{どめ}沙^さ依^よ

世界には、戦争をしている国があります。そうした国では、家族がばらばらになることがあるそうです。

わたしはニュースを見ながら、「家族みんなでごはんを食べることができない人は、きっとたくさんいるんだろうな」と思います。どこの国の人でも、きつと、家族みんなでごはんを食べたいとねがっているはずです。

わたしにとって、一番の平和は、家族みんなでごはんを食べることです。

わたしの家では、いつも家族そろってごはんを食べています。みんなで「いただきます」をすると、ごはんが特別おいしく感じられて、わたしはうれしい気持ちになります。

わたしには、おばあちゃんがいます。ごはんの時間には、いつもいっしょに食べてくれます。にこにこ笑って、みんなの話を聞いてくれます。

でも、ある日、おばあちゃんがごはんになっても部屋から出てきませんでした。わたしたちは、おばあちゃんぬきで食べることになりました。

わたしは勇気を出して、部屋にいるおばあちゃんに「いっしょにごはんを食べようよ」と声をかけに行きました。でも、おばあちゃんは何も言わず、だまっただままでした。わたしは

悲しい気持ちになりました。

お母さんに理由を聞いてみると、「おばあちゃんにも、一人で食べたい日があるわね」と言うだけでした。わたしは、おばあちゃんはどうしたのかな、と心配でした。

そんな時に食べるごはんは、ちっともおいしくありませんでした。その日のおかずが何だったのか、よく覚えていません。ただ、ぼうっとして食べていました。わたしは「いっしょに食べたいだけなのにな。一人いなくてもさみしいな」と思いました。

わたしたちが二階に上がってから、おばあちゃんは一人で食べていたそうです。おばあちゃんも、わたしと同じように、「つまらないな」と思って食べていたのかな。おいしくなかったりしなかったのかな。

わたしは、家族みんなでごはんを食べられるということが、一番の平和なのだと思います。そんな平和が、毎日続いているほしいです。それは、わたしだけでなく、世界中の人たちも同じだと思います。

世界中のみんなが、平和にごはんを食べられる日が来てほしいです。そうでないと、ごはんはおいしく食べられません。次の日、おばあちゃんごはんの時間に、部屋から出てきました。おばあちゃんといっしょに「いただきます」を言いました。わたしは本当にうれしい気持ちでした。いつものようにあまりしゃべらないおばあちゃんですが、そばにいてくれるだけで、ごはんはとてもおいしくなりました。

これからも、家族いっしょがいいです。

優 秀 賞

心にとどく

愛媛県愛媛大学教育学部附属小学校二年

若^{わか}狭^さ早^{そう}

楽しいこと、かなしいこと、聞いてほしいこと。それを五七五の「はいく」にすることが、ぼくは好きです。ぼくのお父さんも、しまねのはいくの会で「もつとすてきなはいく」がよめるようにがんばっています。

「自分の気もちをじゆうに言えることは、何よりへいわなことなんだよ。」

と、お父さんは言います。今から八十年前、日本がせんそうをしていたころは、

「せんそうをやめよう。」

ということばは、ゆるされませんでした。でも、せんそうがおわって、へいわへのねがいをことばにできるようになりました。中でも、永井先生がのこしたことばは、今も多くの人

の心にとどいています。
永井先生は、きずついた人たちのために、休む間もなくしんさつをつづけたそうです。むりをしすぎてたおれてしまう時、

光りつつ秋雲高く消えにけり

このはいくをよんだそうです。ぼろぼろの体で、きつといたくてくるしかつたと思います。でも、見上げた空のまぶしさをよんだ永井先生の心は、へいわそのものです。

きよ年の秋、お父さんはしまねで行われたはいくの全国大会にさんかしました。大会のおせわをする人が足りなかったので、お父さんはできることをさがしてお手つだいしたそうです。会場までの道あんないをしたり、はいくがいんさつされた紙をたくさんはこんだり。走り回ってへろへろになったそうです。

「人のやくに立ててよかった。」

と、お父さんはにこにこしていました。大会であつまったはいくは、しまねの町なみはもちろん、へいわへのねがいもよまれたそうです。それはとてもすてきなことだと思います。

永井先生のように、お父さんのように。ぼくも人のためにできることをがんばりながら、心にとどくはいくをよみたいと思います。

佳作

ほくが今できること

島根県雲南市立三刀屋小学校三年

岡田琉位^{おかだ るい}

永井たかしはかせ。はかせは、原子ばくだんのせいでこめかみから大りように出血して、とてもいたかっただろうけれど、たくさんの人をすくって、とてもやさしい人だと思いました。きっとぼくなら、泣くくらいしかできません。はかせは、自分の命より、人の命を先に考えることができるのもすごい人だと思いました。

はかせのように、自分の命よりまわりの人の命を先に考えることは、今のぼくにはなかなかできません。だからぼくは一生けん命考えました。そして思いついたこと、それは、だれにもわる口を言わないこととほう力をふるわないことです。

ぼくは二年生のとき、いとこと遊んでいて、一生けん命作っていたレゴをこわされてしまい、いとこにわる口を言ったり、たたいたりしてしまったことがあります。そのとき作っていたものは、作り方の紙をなくしてしまって、もう二度と作ることができないものでした。こわされてしまったしゅん間、ぼくはいとこにはらが立って、感じがどうしでもどうしてもおさえられなくなってしまうと、いとこが泣くまでずっとつづけてしまいました。

そのときのことだけは、今でも心にずっとのこっていてわ

すれることができません。そのときは、もうどうなってしまったでもいい！と、なげやりな気持ちになってしまいました。それに、もう友達なんているいないほうがいいと思って、相手のことを全く考えていませんでした。

ぼくがたたいたり、わる口を言ったりして、友だちが泣いてしまっても、ぼくは自分が何をしてしまったのかわかっていませんでした。

しかし、永井たかしはかせだったらどうしていたのかな。いくらにはらが立つことがあったとしても、友だちにわる口を言ったり、たたいたりしないと思います。

それは、はかせの「によこあい人」という言葉があるからです。自分のようにまわりの人も大切にしようとする人が、わる口を言ったり、たたいたりすると相手がどんな気持ちになるのかを考えないはずがありません。

ぼくも永井たかしはかせのように、これからは、人をきずつけることはしません。

もし何かいやなことがあったとしても、手を出す前に「やめて。」と言って言葉で返したり、まわりの人に言って助けてもらったりします。

永井たかしはかせ。ぼくも、人のことを先に考えることができるやさしい人になれるように、これからもっと自分に分にできることをふやしていきます。はかせのようなすごいことはできないかもしれないけれど、少しでもはかせのような人になれるように、心を強くしてがんばります。

佳 作

わたしにできること

島根県雲南市立鍋山小学校二年

飯塚陽菜
いいつかひな

いつも、学校へ行く時に、おかあさんが、かみの毛をむすんでくれます。プールの時には、おだんご、ツインテールの時もあります。かわいいかみがたにしてくれるので、わたしは、えがおになります。

「かみの毛をきふしてみようか。」

とおかあさんがわたしに話しました。びょう気の人に、かみの毛をとどけて、たすけることを「ヘアドネーション」と言います。

わたしは、ヘアドネーションをしています。今、三回目にチャレンジしています。はじめは、七五三で長くのばしたかみの毛をきる時に、おかあさんがチャレンジしようと言ってやりました。三さいだったので、わたしは、おぼえています。二回目の時のことは、よくおぼえています。

二回目は小学校に入る前にしました。その時におかあさんから、ヘアドネーションの話を聞きました。びょう気でかみの毛が生えてこなかったり、ちりょうでぬけてしまったりする人がいることや、わたしのかみの毛で、その人たちをたす

けることができることも教えてもらいました。だから、二回目の時は、自分から「やりたい。」と思ってヘアドネーションをしました。わたしのかみの毛が人をたすけてえがおにできると思うとうれしい気もちになりました。

今、かみの毛は、わたしのこしまでとどきそうです。あつくてたいへんな時もあります。だけど、人のためになるなら、がんばれます。ヘアドネーションが何なのか、わたしのかみの毛がどんな風になるのかは、あまり分かっていません。けれど、わたしのかみの毛でえがおになる人がいることだけは、分かっています。わたしが、おかあさんにまいあさしてもらっているみたいに、びょう気の人、かみの毛でえがおになれるといいなと思っています。

最優秀賞

青空を見上げて

東京都星美学園小学校六年

浦野恵奈

私のクラスは、とても温かく優しく、面白い。いつも笑顔が飛びかっている、とても居心地がいいクラスだ。

ある朝、ニュースで戦後八十年という言葉が耳に入った。私の学校では平和とは何か答えを見つけ、またその答えを下級生たちに伝える平和学習を行っている。

学校で、場所は違うけれど長崎で被爆された永井隆さんの生涯、また原爆が投下された広島や長崎のことも学んだ。その日はいつものクラスとは違う、重い雰囲気漂っていた。本当にこんなことが起きたのか信じられなかった。

ふと、思った。戦争中はみんなどんな顔をしていたのだろう。きつと私たちとは違う、暗い顔をしていたのだろうか。それとは反対に、教室の中では笑顔が溢れている。もうそんな暗い顔があつてはいけなさと感じた。

実際に広島に行き、本川小学校という被爆した小学校に行った。そこで奇跡的に生き残った人は、四百人中、一人。二百分の一の確率。校舎は焼けこげて真っ黒。熱い爆風が通った跡もあった。そこで、驚いたことになんと長崎で被爆された永井隆さんのばらと、そのばらの子孫が植えてあったのだ。笑っているように、ピンク色の輝いた花びらを見せる。

まるで、永井隆さんの心のようにだった。いつまでも咲き誇り続けるばらを見て、一人一人のかけがえのない尊い命もばらのような綺麗な命だと感じた。

五年生の時、クラスみんなで手を繋ぎ、みんなの顔を見合った。みんな笑顔で、手があたたかかった。

「これが温もりだよ。暖かいでしょう。」

と、先生が笑顔で教えてくれた。温もりとは、体温があるということ。生きているということ。だと、学んだ。

そして今、私たちに原爆を投下させないようにできること、戦争を起こさないようにできることを学び、考えた。それは、自分のことも、周りの人も大切にすること。この悲しい現実を、後世に伝えていくこと。一人一人が思いやりを持てば、みんなが笑顔になれる。

今、いつか世界の人々と笑える日が来ることを願って、作文を書いている。今、あの空の下で笑っている人がいる。遠くの雲の下で、戦争を受けて苦しんでいる人、今亡くなつていった人もいる。見上げれば、どこまでもある澄んだ青空でも、八十年前は灰色とどす黒い赤色だった。もう、空をこんな色にはさせてはいけない。みんなを暗い顔にさせてはいけない。二度と戦争をしてはいけない。二度と、原子爆弾を忘れてはいけない。投下させてはいけない。

そのことを心にとめ、世界中のみんなが手を繋いで笑い合えることを願って、今、生かされている責任を持って、あの青空と一緒に、伝え、祈り続けます。

優 秀 賞

ぼくの責任

島根県雲南市立田井小学校六年

堀江将輝
ほり え まさ き

「黙とう。」

部屋が暗くなり、ぼくは静かに目を閉じて祈りました。ぼくは、今年の六月、雲南市戦没者追悼式に参加しました。会場の前の方に田井地区の勝部さんがおられました。そして、勝部さんは遺族代表として話をされました。戦争のことについて話される時、言葉に少し詰まるような様子を見て、平和を願う気持ちの強さを感じました。命をうばいあう戦争への怒りや、たくさんの人が亡くなったという悲しみの気持ちが伝わりました。

追悼式では、特攻という命を犠牲にして突撃する戦争の作戦で亡くなった人について初めて知りました。雲南市にも特攻で亡くなった人が二人いると分かり、戦争が確かにあったと感じました。この特攻を実行する人は、どんな気持ちだったのだろうかと考えました。国のために光栄だと言う気持ちもあると思うけど、それより自分が死んでしまうという恐怖もきつとある。もし、ぼくがその時に指名されたら、恐怖で逃げ出したい気持ちになるだろう。でも、特攻の人たちは逃げられない。特攻で死ぬしかない。絶望という言葉が浮かび、頭がぐちゃぐちゃになりました。この命を犠牲にして突撃す

る特攻という作戦は本当に恐ろしいと思いました。

同じ六月、ぼくは永井隆記念館を見学して、「如己愛人」という言葉を知りました。この言葉は自分のように人を愛しなさいという意味です。如己愛人をみんなが実行すれば戦争は起こらないのに。

ぼくは平和とは何かと考えてみました。大きく考えると戦争が起きていなければ平和だと思うけど、小さく考えると、誰かが悲しい思いをせずに、気持ちよく過ごしていくことも、平和だと思います。でも、それは結構難しいです。

ぼくは、休み時間に野球をよくしています。勝ち負けがある遊びだとみんなの本気さが違い、チームわけで文句を言つて悲しい思いをする人が出てきました。だから、最近の休み時間は、ちっともおもしろくなくて平和ではなかったと思います。そこでぼくはその後みんなです話し合おうと言つて、どこが良くなかったかを出しあいました。数人で勝手にチームを決めてしまったことや、それを止める人がいなかったことが出てきました。そして、次の週には、みんなです話し合ったことを生かして遊びました。公平なルールの中で思いっきりやろうと決めました。そうすると、とても楽しく遊べました。どんな場面でも相手を思いやること、勇気をもって伝えることがぼくでもできる平和への第一歩だと思います。

戦後八十年だけど、ぼくはそこまで昔ではないように思います。難しい問題にもみんな考え、関わることももっともつと平和な日常を続けていきたいなと思います。これから平和でいられるかはぼくたちの責任です。

佳作

ふうちゃん

島根県雲南市立大東小学校六年

米^{よね}原^{はら}あさひ

「ふうちゃん死んじゃったんだって。」

その一言で、私は一気にどん底にたたきつけられた。

私の祖母の家には、猫がいた。名前は「ふう子」だった。祖母の家に行くといつも庭でお出迎えをしてくれる。家に入ろうとすると私の足に体をこすりつけて、まるで「待っていたよ。」と言ってくれているように感じていた。あごをなでるとゴロンと寝転がって可愛かった。けれど、そんなふうちゃんはもう十五歳。人間に例えると約七十六歳に相当する。私はいつふうちゃんが死ぬかわからない、もし、もうすぐ死んでしまったらどうしようという不安で胸がいっぱいだった。でもそんなふうちゃんは、寿命を迎えそうでも毎日私に愛をくれた。

永井隆博士、これは「如己愛人」と言うのでしょうか。きつとそうだろう。いや、そうに違いないと信じていた。

ある日、私は友達と遊んでいた。私以外の家族は祖母の家に行っていた。私が家に帰ったとき、母と父からふうちゃんの死を聞いた。もう、ふうちゃんの可愛い鳴き声は聞けないのかな。どうして私も一緒におばあちゃん家に行かなかったのだろう。ふうちゃんとの思い出が勝手に黒くぬりつぶされ

ていく。私は本当にふうちゃんが亡くなってしまったことを信じていなかった。いや、信じたくなかったのだと思う。しかし、次に祖母の家に行ったときには、お墓が一つ増えていた。それを見て現実を突きつけられ、「一人の家族を失った」ことを感じ、深い悲しみを負った。

それから四年経った今は違う。もちろん悲しいし、ふうちゃんを失いたくなかった。その思いは変わらないけれど、もう一つの感情が生まれた。それは、ふうちゃんが見守ってくれていると思えるようになったことである。習い事や友達関係、家族、学校のなやみなどがあつた時、ふうちゃんを思い出すと心のモヤモヤがうすれていく。

ふうちゃんは、年を取って、身体が重くなっても、かわいい声で鳴いて私を出迎えてくれた。亡くなった後も、私を見守り励ましてくれている。そこにはまさしく「如己愛人」の考え方があつたと思う。自分が傷を負いながらも人のために行動する永井隆博士、いつでも私に愛をくれ、私のことを見守ってくれているふうちゃん。これから私も人のために自分ができることを考えていきたいと思えるようになった。

町で時々猫を見かける。そのたびに「ふうちゃんに似ているな。」と思う。そして、そのたびに私は人に優しくなれる。家族のためにお手伝いができる。私はこれからもふうちゃんのことを思い出すだろう。

これから、自分にできることを考えて前を向いて歩いていくよ。だからこれからも見守っていてね。ふうちゃん。

最優秀賞

好きなことのできる幸せ

沖縄県糸満市立兼城中学校二年

村島心月 むらしま こころつき

「平和と呼ぶには遠く 歴史にするには早く」

皆さんはこの曲を知っているだろうか？

この曲は、私達が今年の慰霊の日にひめゆりの塔で行われた慰霊祭で歌ったモンゴル800の「himeyuri〜ひめゆりの詩〜」という曲の歌詞の一部だ。今世界は平和だろうか？

私は今年、戦後八十年の節目の年の慰霊の日に向けて、合唱で平和を伝えるために、糸満市内の中高中生に呼びかけられた「糸満平和合唱団」に入った。

ここでの経験が私の心に大きな影響を与えている。

今年の二月下旬、学校から一通のお便りがあった。それは、「六月二十三日に合唱と一緒に平和を伝えよう。」という合唱団の団員募集のお便りだった。あまり気乗りはしなかったが、家に帰り母にその手紙を渡すと、「絶対やったほうがいいよ。一生に一度の経験だし、心に残るよ」と言われ、私は頷いた。

四月、二年生になり合唱練習が本格的に始まった。初日から歌の練習が始まると思っていたら私の予想は大きく外れた。初日はひめゆり資料館の方が、ひめゆり学徒隊の悲劇について詳しく教えてくださった。話を聞いていると、自然と涙が出た。毎年六月になると、学校で平和学習があり、沖縄戦についてはある程度理解しているつもりだったが、ひめゆり学徒隊について学んだのは、これが初めてだった。初めて知ることが圧倒的に多く、その内容も、学徒隊の生徒たちが私と年齢が近いこれまで学んできた沖縄戦のことよりも一層残酷で、沖縄戦を身近なものに感じることができた。その時

私は、「沖縄戦のことを知っているつもりだったけれど、知らないことがまだまだたくさんある」ということに気がついた。その日から、私の、合唱とひめゆり学徒隊に対する気持ちが少しずつ変化し、合唱練習へも一層熱が入った。

四月から六月までずっと真剣に取り組み、私達の合唱は本番を迎えた。私達は全部で四曲歌った。その中の「別れの曲（うた）」は、当時の沖縄県女子師範学校の生徒達が卒業式で歌う予定だった。しかし沖縄戦が始まってしまったため、「別れの曲（うた）」の代わりに「海行かば」という軍歌が歌われた。歌えなかった「別れの曲（うた）」は、当時の生徒たちのために、音楽の先生が作曲してくださった思い入れのある曲だという。一番と三番の歌詞は卒業生から在校生に向けた歌詞、二番と四番は在校生が卒業生に向けた歌詞で構成されている。

慰霊祭には当時の女子師範学校の生徒だった方も参列していた。私達が「別れの曲（うた）」や「校歌」を歌うと一緒に歌い、涙を流していた。その姿を見て私は、雨のように激しく爆弾が降る中、私とそんなに年齢の変わらない少女たちが必死に生きたこと、戦争で青春を奪われたことを考えたとともに心が痛くなった。私は三歳からピアノを習っていて音楽がいつも身近にあり、音楽は私の生活の一部である。戦争中だからといって、好きな歌を歌う日常が奪われたこと、そのことがこれまでの平和学習で学んだことよりも、私には辛かった。合唱団の活動を通してひめゆり学徒隊について知り、戦争に当たり前を奪われる恐ろしさと当たり前の日常を過ごすことの尊さを知った。

戦争がなければ好きな歌を歌ったり好きな服を着たり、それぞれの青春を楽しむことができたはずだ。

戦後八十年、歴史にするには早すぎる。私達は悲劇を忘れてはならない。これからも日常を過ごすことのできるありがたさや好きなことのできる喜びを噛み締めながら、祈りを込めて歌い続けたい。

優秀賞

語り継げ、青の記憶。

島根県島根大学教育学部附属義務教育学校九年

藤原和奏
ふじ はら わ かな

「こげなところでも空襲警報が出たんだなあ。家族と一緒に逃げたのを
ようけ覚えてる。」

何年前だろうか。遙か昔に祖父から聞いた言葉が忘れられない。

私は永井隆博士誕生の地、島根県松江市に住んでいる。水の都と呼ばれ、美しい宍道湖と中海に包まれるこの街。そんな松江から車で揺られ揺られて四十分ほど、祖父は永井博士ゆかりの地、雲南市に住んでいる。昼に寝転がると近くの森がざわざわ騒いで、たまに踏切になる。ガタンゴトンと大きく車体を鳴らして進む電車のように、ゆっくりと時が流れていくこの場所が私は昔から大好きだ。

もともと私の祖父は母方も父方も戦時中に生まれている。母方の父は終戦時四歳だったため戦後の話をよくしてくれた一方、父方の祖父は戦後九歳だったため戦時中の話をしてくれたのを覚えている。

記憶も薄れるくらいの昔、夏の日だった。青空を走るトロッコ列車の青が眩しく、窓に顔を近付けていた。そんなとき祖父が「おじいさんが子供の頃はここにも空襲警報が来たなあ。」

と言った。当時小学生だった私はなにか冗談でも言っているのかと思った。しかし彼はその後と遠くを見つめるかのように戦争の話を始めた。私は衝撃と驚きで上手く話を飲み込めなかった。こんなにのどかで美しいまちにも戦争は来たのか。なぜ人々はそのような事ができるのか。疑問で仕方がなかった。

しばらく時は流れ私は十四になった。修学旅行で訪れた沖縄では学生や一般人が数多く命を落としたことを学んだ。真つ暗なガマで戦争の恐ろしさと戦争がどれだけ人々を狂わせるかを学んだ。それからは数十年前の同じ国だとは信じられず、しばらく眠れない日々が続いた。眠れない夜にふと気がついたのは、戦争について教えて

くれたのはほとんど戦争を経験をしていない人だということ。糸数壕でガイドをしてくださった方も、平和講話をしてくださった方も皆、戦後生まれだった。

戦後八十年。戦争体験者の声は年々減っていく。テレビでもリアルな戦争の様子はほとんど流れなくなった。本当にこれでもいいのだろうか。このまま戦争を風化させて、いいのだろうか。そんなわけがない。だから私は再び、祖父の住む雲南市に帰った。梅雨が明け、空がああ夏のように青かった。祖父はもう八十九になって、喋ることも難しくなっていた。そんな祖父に懇願して戦争の話を聞きたい、体験者の思いを聞きたいと言った。

「あざんこと二度と起こしちゃいけん。人の命を奪うことがあつていいわけがない。」

ただ一言だけ、かすれるような声でそういった。心からの悲鳴のようだった。

人々はよく言う、「戦争はあつてはならない、平和は守らなければならぬ」と。だがしかし、世界は残酷にも争いが絶えない。悔しいことに、何も変えられない現実がある。ならば学生の私達にできることは、何があるのだろうか。私にだって心の内では収まらない、叫びたいくらいの平和への思いがある。だから私は、語り継ぐ側になりたいと思った。

今私たちにできること。それは語ること。学び、問い、受け継ぐこと。そして戦争は誰かの遠い記憶ではなく、私達自身の未来に関わる現実だと自覚すること。怒りも悲しみも希望もそのまま語り繋いでいくこと。誰かの語りが途切れてしまう前に受け取った手で、それを未来へ渡すこと。

大好きなトロッコ列車は老朽化のため消えてしまった。青い車体が消えてしまった時のような心にポッカリと穴が開くあの感覚。忘れられてしまう、自分も忘れてしまうのではないかというようなあの感覚、それを二度と繰り返さないために。

私は語り続ける。この国の記憶が消えてしまわぬように。

佳作

平和への架け橋

沖縄県糸満市立三和中学校三年

千^ち葉^ば結^{ゆい}莉^り

「戦争をおこすのは確かに人間です。しかしそれ以上に戦争を許さない努力のできるのも私たち人間ではないでしょうか。」

私が沖縄県平和祈念資料館を訪れて、一番印象に残っている言葉です。

今年、沖縄県は戦後八十年の節目を迎えます。十五歳になる私は、いつも通り学校に行き、温かいご飯を食べ、仲間と共に目標にむかって没頭する日々が、当たり前のようにすぎています。そんな、何気なくすごしている日々の中にも戦争があったということを実感させるものがあります。それは不発弾です。最近のニュースで不発弾が爆発したということを知りました。八十年経った今でも戦争が起ったということは決して消えることなく、ずっと奥底にとじこめられています。一本の木、一本の草も見ることができない焼け野原となった沖縄。ここ沖縄の地に根差して日々を暮らしてきた人々が、生きたくても生きることが許されなかった時代がありました。

私は、沖縄戦について小学校から学んできましたが、経験していないことからどうしても自分事として考えることができず、自分から学ぼうという姿勢にはなれませんでした。しかし、二〇二二年に国同士で戦争がはじまったことをニュースで知り、その時初めて、今戦争が本当に起きているのだという実感と、怖いという思いを強くもちました。このことをきっかけに、戦争は起きてほしくない、

平和であり続けてほしいと昨年の夏、糸満市が平和を伝える人材を育成するために実施していた、平和の語り部育成事業に参加しました。実際に壕や慰霊碑など市内外の戦跡巡りに行き、県外平和使節団の方達と交流し、沖縄戦について学びました。対馬丸記念館や沖縄県平和祈念資料館にも足を運びました。平和祈念資料館の中には、戦時中の写真や実際に使われていた道具が展示されていました。展示室内に多くの写真が広がっている中、私の目にうつったのは、白い壁に書かれている展示結びの言葉です。

「戦争をおこすのは確かに人間です。しかしそれ以上に戦争を許さない努力のできるのも私たち人間ではないでしょうか。」

画用紙のような大きくて真っ白な壁に書かれた言葉。戦争が起きてしまうのは、自然災害でも気候変動のせいでもありません。私たち人間の行動の結果です。平和は、私たち人間がどう行動し考えるかで近づく一方、私たち人間がすぐにこわしてしまうこともできます。だからこそ、今を生きている私たちが、戦争を絶対に許してはいけないのです。この決意を胸に、私は語り部育成事業で学んだことを活かして、総合学習の授業の中で交流した沖縄県外の中学校三年生に、沖縄戦について自分の言葉で実際に伝えることができました。

沖縄戦の恐ろしさを知り、平和な世界が続いてほしいと願う。私たちにできることは、過去の歴史から学び、戦争を知らない人に正しい情報のまま語り継いでいくことだと思います。過去のあやまちを変えることはできません。しかし、これから待っている未来は、自分たちの行動しだいでも変えることができます。足りないとところは補い合い、お互いに支え合っていく。戦争を許してはいけないと思うことが、平和につながる大きな架け橋につながっていくことを、私は信じています。

佳作

Tくんに出会って変わった心

島根県島根大学教育学部附属義務教育学校八年

高倉 未羽
たか くら み わ

小学六年生の夏休み。夏課題に広島原爆投下の日のこと、長崎原爆投下の日のこと、そして、終戦のこと。その三つをまとめてくる、というものがあつた。私は、テレビや新聞、インターネットを用いて簡単な事実だけを書いた。私にとつてこの課題はめんどくさいものでしかなかった。平和な世界で生きる私だからそんな考えができたのだろう。戦争なんて私には関係ない。正直そう思うところもあつた。もちろん、戦争はやってはいけないこと、だめなことだ。戦争はおそろしいものだ。というのを知っていた。繰り返したくない。という思いももちろんあつた。ウクライナとロシアの話聞いた時も、胸が引き裂かれる思いだった。それでも遠い遠いものだと感じていた。

夏休み明け、総合学習で夏休みにまとめたきた三つのことを発表し合う時間があつた。私は事実だけを述べた。しかし、普段自分から率先して発表することのないTくんが自ら調べてきた事を長々と語った。曾祖母から聞いた戦争。原爆投下の被害に遭われた方のお話。終戦ラジオを聞いた人の話。平和記念公園で行われたこと。など様々なことを語った。私は彼がそんなにもくわしく調べてきていることに驚きと焦りを感じた。そして、彼に問いかけた。なぜそんなにも戦争や原爆投下の話をくわしく調べるのか、私たちには戦争なんて関係ないじゃないか。と。すると彼は怒りを含んだ声で言った。

「君は戦争を繰り返し返したくないと思うだろう？そのためには戦争を知らないといけないんだ。これはお遊びじゃないんだ。」

と。その時に私は気づかされた。戦争のなにが自分に関係ないんだ。と。自分の中で戦争を繰り返し返したくない。そう思っていたはずなのに、なぜ、関係ない、遠くに感じる。なんて思っていたのだろうか。今、この平和な場所で生きられているのは、その戦争があつたからなの。そこから私は戦争について熱心に調べた。そして、修学旅行では、広島に行き、平和記念公園などを訪問した。そこで、その場所であつたこと。その場所にいた人たちの気持ちをずっと考えた。資料館に行ったり、インタビューをしたりしてより深めていった。Tくんとはたまたま同じ班だったため、資料を見ながら、常に意見を交換した。そのたびに戦争を繰り返し返したくない。という思いが高まった。そして、修学旅行が終わった後のまとめの時間。Tくんに貰った意見を参考にしながら、「今、私にできる平和とは」を題にクラスの前で発表した。（以下、その時に読んだ原稿から抜粋）

「私たちが今からできることは、戦争の悲惨さを伝えていくことです。しかし、普段の会話や雑談の中でそんな話をするのは難しいと思います。では、普段からできることはなんでしょうか。それは、忘れないこと。それと平和に感謝することです。一つ一つの衣食住に感謝し、生きていることにも感謝すること。戦争のとき、生きることが当たり前じゃなかった。死んでしまうのが当たり前だった。今の平和な世が当たり前じゃないことを心に留めておいてください。」

私の心はTくんの言葉で大きく変わった。戦争は遠いものじゃない。Tくんは私にそう教えてくれた。Tくんは私の発表を聞いた後こう言ってくれた。

「平和と感謝。これからも平和に感謝して、戦争を忘れないで生きていくよ。」

戦争と平和について。それは思ったよりも難しくて複雑で解きにくい問題だけれど、様々な人と関わり、できる限りの平和を追い求め、戦争を忘れないでいたい。そして、将来的には、高校生平和大使として活躍したいと思っている。

最優秀賞

証

東京都東京大学教育学部附属中等教育学校五年

黒木大誠

「戦死」

これほど、残酷で悲惨な言葉は他にあるだろうか。しかし、現実
に今手元にある二枚の紙には、確かにこの二文字が記されている。

「佐々木 弘 命 戦死」

「佐々木 福見 命 戦死」

母の実家のある岩手県宮古市。三陸リアス海岸の風光明媚な高台
にある先祖の墓の隣に小さな苔むした石が立っている。

写真でしか見たことのない祖父の二人の兄、大伯父達のお墓である。
幼い頃は帰省する度に仏壇に置かれた、水兵さんの格好をした大
伯父達の二人の写真を見ても、気にも留めなかった。

しかし、十六才になった私が写真を前にして抱いた気持ちは今ま
では違っていた。

「戦争で死んだ」

そんな漠然としたものではなく、大伯父達の生きた証を探したい。
そう思ったのだ。

曾祖父母はもちろん、祖父も亡くなり残されたのは写真二枚。そ
んな時、祖母が曾祖母から聞いた話として教えてくれた。

明治生まれの曾祖父母は貧しい漁師であり、文盲だった。そして
彼らの二十代になったばかりの二人の息子に赤紙が来て、大伯父達
は横須賀へ行った。ある日曾祖母は夢を見た。

「母ちゃん、あんころ餅を食いてえ」

次の日曾祖母は餅を作って夜行に飛び乗った。しかし文盲の曾祖
母は上野で迷った。それでも事情を聞いた駐在さんが横須賀まで連
れて行ってくれたそうだ。曾祖母は会うことができた一人の息子に
固くなった餅を食べさせ戦地へと送り出した。だが結局息子達は箱

の中の石二つとなり帰ってきた。

話を聞き、もともと大伯父達について知りたく思った私は、靖国神
社へ行った。知っているのは大伯父達の名前と住所だけ。

「調べるのは無理かもしれない」

そう思いながら待つこと十五分、二枚の紙が渡された。そこには息
がつまるような「戦死」の二文字があった。

海軍に招集された大伯父達は所属部隊も乗っていた船も不明、戦
死場所は比島方面、つまりフィリピン沖のどこか。戦死日時は作戦
の中止日であった。そして私は靖国神社の方へ大切な質問をした。

戦死の知らせと共に曾祖父母の元へ届けられたあの石のことである。
「それは靖国の石ではないと思います。お二人は海軍でいらっしゃっ
たので他の場所の石とも考えられにくいです……」

隣で話を聞いていた母が慟哭した。私はこの二枚の紙を持つ手が
震えた。怒り？ 憤り？ 悲しみ？ 違う、そんな簡単な感情ではない。

「こんな間違っている。」
大伯父達の生きた証は、この戦死という二文字しかないのだ。生
きるということは、こんなことで証明されてはならない。もちろん
生命には必ず終わりがある。しかしそれは、大伯父達の夢も希望も、
そして人生までもをたった一言で終わらせてはいけないのだ。

目には見えない曾祖父母の愛情。夜行で運んだ固くなったあんこ
ろ餅。残された二枚の写真、そして、いつ、誰が木箱に入れたかは
分からないが、家族の他に彼らの死を悼み、御霊を鎮魂し、平和へ
の願いとともに曾祖父母の元へ届けられた石。そんな僅かな痕跡さ
えも戦死という無惨な言葉で切り捨ててすることは、許されないのだ。

ぎゅっと握った紙に涙がポツポツと落ちた。

今年も終戦記念日が来る。八十回目の終戦記念日。過去を振り返り、
戦争で犠牲になった人々の思いを忘れることなく、決してこの過ち
を繰り返すことがないように、一人一人が思いを馳せる日。そして、
これまでぼんやりとしか感じていなかった平和ではなく、実行する
平和への決意を新たにする大切な日。

それが、大伯父達をはじめ、戦争で亡くなった方々の生きた証と
なるのだから。

優 秀 賞

問 い 続 け た 先 に

滋賀県ヴォーリス学園近江兄弟社高等学校三年

小 西 琉 偉

「戦争を防ごう！と叫ぶのはいいが、ただ叫ぶだけで、戦争の原因をのぞかなけりや、なんにもならないね。」

これは永井隆博士の著書『この子を残して』に記された一節だ。私はこの言葉の真意を、遠く離れた島国での一つの出会いを通して、身をもって知ることとなった。

高校二年生の夏、私は文部科学省主催の「トビタテ！留学JAP AN」プログラムに選ばれ、地中海に浮かぶマルタ共和国へ留学した。世界各国から集まった留学生たちと共に生活しながら、世界に日本が経験してきた戦争の悲惨さや、平和の尊さを伝える活動に取り組むためだ。その活動の中で出会ったのが、リビア出身の青年・ハフッドだった。彼の祖国リビアでは、二〇一一年のカダフィ政権崩壊以降、内戦が続いており、今も日常の中に「明日死ぬかもしれない」という戦争への恐怖があるそうだ。内戦による死者は推定五万人を超え、未来を奪われる子どもたちも少なくない。ハフッドは私との対話の中で、自らの故郷について静かに語った。

「リビアが戦争をしているのは、国民がそれを望んでいるからじゃない。どれだけ頑張っても生活はよくならず、人々は不満を抱え、平和を考える余裕さえないからだ。」

ハフッドが語るアフリカの厳しい現実には私にとって、心に重くのしかかるものだった。以前の私なら、「それでも戦争はよくない。人を殺すのは、どんな理由があっても許されない。」と、安易な気持ちで軽々しく平和を語っていただろう。しかし今、その言葉はあまりにも無力に思えた。

すると、彼はさらに言った。

「だからこそ、僕はここにいる。マルタで世界を学び、それを祖国に持ち帰る。リビアの経済を豊かにして、人々の心にもう一度、平和への希望を取り戻したいんだ。」

その時、私は気づかされた。平和とは、誰かに与えられるものではないのだと。日本に住む私にとって、平和とは「守るもの」だった。しかし、リビアでは違う。彼らにとっての平和とは、「築き上げるもの」だったのだ。

日本に帰国後も、ハフッドが語ったアフリカの現状が私の心に深く残っていた。その中で、私は「なぜアフリカは貧しいままなのか」について考えるトビタテ生たちの集まりに参加した。主催者は、大学生時代にウガンダのNGO「あしなが育英会」で活動してきた角田さんだ。この交流会で、様々な国に留学した高校生とアフリカの貧困について、経済、歴史、政治など多角的な視点で議論を重ねた。リビアの未来を語ったハフッドの強いまなざしが、何度も脳裏をよぎる。そのたびに、心のなかで平和について問い続けた。角田さんは、ウガンダでの活動中に撮った写真を見せてくれた。そこには、泥だらけになりながらも、アフリカの子どもたちと無邪気に笑い合う角田さんの姿があった。

「私たちの活動は、ほんの小さな一歩かもしれない。けれど、その一歩がいつかアフリカを平和にする大きなうねりになってほしい。」この言葉には強い決意が込められていた。

被爆医師として、命を削りながらも「如己愛人」の精神で平和を訴え続けた永井隆博士。大学生ながら、アフリカに渡りボランティア活動に奔走した角田さん。彼らの平和への姿勢を追いかけ、私もまた、他者の痛みにも真摯に向き合い、自ら行動を起こして「育む平和」を目指していきたい。そのために、絶え間なく考え続けよう。「なぜ戦争が起きるのか」。世界の人々の暮らしが少しでも豊かになれば、戦争はきつと防げるはずだ。永井隆博士が遺し、角田さんが紡いだ「平和」への想いを受け継ぎ、私はこれからも歩み続けていく。平和とは、誰かから与えられるものではない。私たち一人ひとりが、問い、悩み、手を伸ばした先で、築き上げていくものだから。

佳作

命どう宝。

山梨県立甲府第一高等学校三年

田村祐希

「目の前で、兄が殺されました。」沖縄での平和学習で聞いた、私
がずっと忘れられない言葉だ。修学旅行で浮かれていた私は、一
気に戦争があったという事実を突きつけられた。平和講師のおばあ
さんは、泣きながら、途切れつつも、最後まで当時のことを話して
くれた。山梨から沖縄へ行く前に、事前学習として沖縄戦について
デオを見たりしたが、実際に経験した人が話す内容は、私たちが学
んで感じた沖縄戦の悲惨さをはるかに超えていたのである。当時は
米兵に捕まったら目をえぐり取られ殺されると教えられていた。そ
のため、身の危険を感じた人々は互いに殺し合ったのだ。考えられ
るだろうか。母親が腹を痛めて生んだ子供を、米兵からいたずらさ
れないように自分の手で殺すのだ。そして最後には、子供の死体と
共に自分を。私はメモが取れなかった。ペンを持つ手が震えていた
からだ。おばあさんは、話し方や仕草からとても心穏やかな人だと
わかった。そんな人が自分の目の前で兄の腹が引きちぎれ血が出て
殺されるのを、鉄の雨におびえて生きるのを、どうして経験しなく
てはいけなかったんだと力強く拳を握っていた。彼女は、自分の兄
の話をしだした途端、息が詰まるように泣きながら話していたのだ。
どれほど愛していたのか、言葉にせずとも十分伝わった。何年経
とうが消えることのない痛みや悲しみがそこにはあったのである。メ
モを取るはずだった紙は、私の涙で濡れていた。戦争で大切な家族
を亡くした彼女は、一人になろうがそれでも必死に生きた。平和学
習の日、ガマに入った。何も見えない暗闇。そこで多くの人が小さ
な希望を持って生きていた。私と同じくらいの年頃の女の子たちが、

この場所で看護要員として死に物狂いで働いたと聞いた。トイレは
無いため、バケツの様な簡易的な物に溜めて捨てていたそうだ。そ
の処理も、彼女たちがした。ガマの中の足場は悪い。捨てに行く最
中に転んでしまう子もいたという。ガマの中は風通しが悪く、その
中で負傷した日本兵の看護をしていたのだ。負傷した日本兵。その
中にはもう手遅れだという者もいた。私たちは重傷を負った日本兵
が集められた所まで案内され、懐中電灯の明かりを皆で消した。水
の滴る音が響き渡り、小さな音でも耳に入った。「ここでね、重傷し
た日本兵は自分が死ぬのを待つんです。戦争で精神を病んだ、狂っ
てしまわざるを得なかった人が奇声をあげたりもしたんです。この
暗闇で。」案内してくれたおじさんがゆっくりとそう語った。命だろ
ひとつの大切な命だろと思った。国のためにと戦った果てに、痛さ
に悶えながら最期の時が待たされることが許されるわけがない。暗
闇でその奇声が止まったとき、仲間の死を感じるのだ。沖縄では、
人々の飛び交う笑い声で満ち溢れていた。そこには賑やかな笑い声
をかき消す、私たちの頭上を飛ぶものがいた。米軍機であった。現
地の人は米軍機の飛ぶ青空を見つめていた。この土地で生きてきた
人にしかできないような眼差しをして。一九四五年の夏から、今年
で戦後八十年を迎えた。一つの端末で簡単に人を殺せるようになって
世の中で、私たちに何ができるのか沖縄は教えてくれた。言葉で
人を傷つけるのではなく、言葉の力で平和を繋いでいけと。命に感
謝しろと。私のモットーは、命どう宝。沖縄の言葉で、命こそ宝と
いう意味だ。沖縄戦を経験した先人たちの、平和への想いが詰まっ
ている。十七歳の私ができることは、小さなことで限りあるものか
もしれないけれど、言葉の力は大きく、限らない。私は平和である
ことの尊さを伝え続ける。大切な人と生きる有り難さを分かち合え
る社会をつくる。お互いの利益を求めて武器を持つのではなく、愛
を持って共に認めることができる世の中を実現させるために。うち
なんちゅが教えてくれた平和の本質を繋ぐことが、私の夢だ。

佳作

ちかいのことば

沖縄県立那覇高等学校二年

あげだしよう
安慶田 翔子

大切なものを守るために、私には何ができるのか。そう考えることが増えてきたのは、ここ数年、人生の先輩方が次々と旅立ってしまい、寂しい思いをしたから、ということもあると思う。

そこで不安になったのは、私の周りの平和の証言者が失われつつある、ということだ。小学生の頃から平和学習を続けてきた私だが、当時聞きこみ調査に関わってくれた方々の高齢化が進んできた。彼ら彼女らから握手と共に手渡された想いを形にしなければならぬ、と感じたのは、恥ずかしながら、残された時間の不確定性をようやく実感して慌てたからに他ならない。時に涙を流しながら、その身に爪を立てながら、未来を繋ごうとする人々の時間の一部を頂いた。私には、それを途切れさせないという義務がある。

証言の聞き込みをさせて頂いた方の一人は、愛楽園という、かつてはハンセン病患者を強制収容するために使われていた施設で出会った。日常生活で感染することはほほえみうえに、治療薬による完治が可能になってもなお、国の政策によってハンセン病患者は長年隔離され、人権を侵害され続けてきた。

例にもれず壮絶な経験を持つ彼は、九歳でハンセン病を発症してから、家族と引き離され、園に強制収容された。沢山の人から人としての権利を奪った政策に、腹の底からこみあげてくる怒りを抱えている。そう証言した彼は、終始穏やかに接してくれた。

一番印象に残っているのは、彼が決して人に怒りを向けなかったことだ。施設には監禁室跡、資料館にはホルマリン漬けの胎児の標本資料。ハンセン病患者は「らい予防法」という政策から、厳重な隔離、違法な堕胎を強制された。我が子を抱き留める前に産声を絶たれた母親、父親。故郷に帰ることなく今も納骨堂に残る人々を知り、

目のあたりにし続け、それでも彼は人を憎まなかった。私の聞く限り、彼が憎いと口にするのは、「らい予防法」という事象に限ることだった。

どんな状況でも、人への愛を忘れなかった彼は、退園後、なおも差別が続く時代。

そんな中で、彼のことを理解し、寄り添い合うことを選んだパートナーを得た。愛を以て、幸せを手に入れた。

しかしこれを美談で終わらせてはいけない。彼らの過去と私達の未来は、繋がっている。

らい予防法は治療法が確立されてなお、施行され続けた。これは、ハンセン病患者は「危険」であり「隔離されるのが当然」という共通認識のもと、その空気の中で生きていく人達は、それを疑うことなどしなかったからである。例え疑ったとて空気の壁はその声を静かに遮断し波風立てない日常を守り続ける。

私達は「空気」によってつくられた「正解」を信じこまされる。そしてその空気をつくる側にいつの間にか立っている。そのことを自覚するべきだ。

空気の壁が導いてくれる未来は、進む間は楽だろう。ただし、それを盲信した結果が犠牲の上成り立っていても、辿り着いた後では引き返せない。失ったものの大切さによりやく気付いた我々が、こんなはずではなかった、私は望んでやっていない。そう振り向いても、結果だけが、自らの立つ「いま」という結果だけが、足元に残っている。

証言者達は、言外に伝えてきた。空気に殺された者達の繋げた未来が今だということ。皆、忘れるなど、考え続けてくれと訴える。

証言者は揃って被害者でありながら、その空気の一部だった。空気がよって奪われ、失った者の自戒と誓いが私達を生かしている。

私の平和学習は終わらない。思考を、考えることをやめてはいけない。空気の壁に奪わせてはいけない。それこそが、愛を失わないために。これからの平和を担う私達に。必要な意識であり、私が自らに課す誓約である。

佳作

思いをツナグ

島根県立出雲高等学校一年

亀尾美月
かめおみつき

焼け焦げた天井が私を変えた。

修学旅行で見た沖縄の戦跡は想像を絶するものでした。飛行機から見た美しい海に浮かぶ島。これからどんなことが待っているのだろうと胸が高鳴っていました。しかし、期待以上の楽しさはありませんでしたが、その背景にある「戦争」に触れたことが、私の中で一番印象深く残っています。

平和祈念資料館で展示の数々をみているとき、私は生きた心地がしませんでした。本当にこれが現実であったのか信じられない気持ちが続くと心のなかに残っていました。ガマでは懐中電灯を消すと真っ暗で重い空気が立ち込めていました。ふと頭上を見上げると黒く焼け焦げた岩肌が当時の状況を生々しく語っているようでした。

島根へ帰った後も、沖縄で見た戦跡の衝撃が忘れられなかった私は、安来市にある「加納美術館」を訪ねました。従軍画家として活動後、フィリピン戦犯一〇五人の命を助けた加納莞菴。彼の作品の中で私は一枚の絵に心を奪われました。天井に届くかと思われるほどの巨大なキャンバスには、必死に戦う兵士と、その横に折り重なる死体が描かれていました。絵の中の風景が沖縄で見た戦跡と重なりました。莞菴についてもっと知りたいと思った私は、莞菴の娘で美術館の名誉館長である佳代子さんに「なぜ莞菴について伝えておられるのか」と伺いました。すると佳代子さんは、「それが私の使命だと思うからです」と話されました。莞菴の思いを、戦争を知らない世代に語り継ぐことが平和を創る第一歩になると思います。そしてその言葉は私にも向けられた言葉のように感じました。

私はこの体験を弁論大会で発表しました。その半年後、私に一通の手紙と書が送られてきました。佳代子さんからでした。その手紙には地方テレビで放送された私の弁論を見て感動し涙が出たと書いてありました。私はその手紙を読んだとき自然と涙がこぼれていました。手紙には、力強い字で「愛」と書かれた莞菴の書が添えられていました。私は書の「愛」という一言に興味を持ちました。なぜ彼は「愛」という一文字を選んだのでしょうか。全ての人が「愛」という心を世界中の人へ持つと戦争はなくなるのではないかと思っています。戦争をなくすることは簡単なことではありません。しかし、一番近くにいる家族、友達からでも「愛」という気持ちを持つてみるのはどうでしょうか。相手を憎むのではなく「愛」することはどうでしょうか。永井博士の「如己愛人」という言葉もそういうことではないでしょうか。莞菴の書は私に様々なことを気づかせてくれました。今まで、自分一人では何も変えられないと思い、何をすればよいのかもわかりませんでした。しかし、一人でも私の主張に耳を傾け、受けとってくださるのならそれでもいいと思います。

佳代子さんからの贈り物の中に二冊の本も入っていました。それは加納莞菴の生涯を描いた絵本で日本語と英訳版がありました。英訳された本は外国の方々へと届けられるそうです。日本から少しずつ海外へと活動が広がっていることが自分事のように嬉しかったです。

戦後八十年となった今年。私達から「戦争」は少しずつ遠ざかっていることを実感しています。この現状は必ず変えなければならなと思います。私は沖縄へ行き、加納美術館へ行き、佳代子さんとの出会い戦争や平和の捉え方が変わりました。戦争の痕跡はものや人を通じて深く刻まれています。それらは次の世代へと受け継ぐために大切に守られてきたと感じました。唯一の被爆国として、日本人は戦争を語り継いでいく義務があると思います。

あの焼け焦げた天井が私を変えた。あの戦争を二度と起こさぬよう私は語り継ぎ、平和な世界を創る一人になると強く決心しました。

佳作

三年の無関心

青森県青森山田高等学校広域通信制課程一年

千田立煌 ちんだりおん

「どうして戦争の話が毎年国語の教科書に載っているか分かりますか？忘れないためです。」あの先生の言葉が、今も静かに心に響く。ウクライナとロシアの戦争が始まったあの冬から、三年という月日が流れた。あの頃、テレビもネットも、ニュースは戦火の映像や避難民の疲れ切った表情で溢れていた。SNSを開けば「戦争」の二文字がトレンドを独占し、学校帰りの子どもたちの会話にも「ウクライナとロシアが…」という言葉が漏れ聞こえた。そんな日々が続いていた。

しかし、今はどうだろう。ニュースは新しい話題に取って代わられ、SNSのトレンドも日常のささやかな出来事に埋もれている。戦争はまだ終わっていないのに、どこか遠い物語のように感じられる瞬間がある。三年は長いのか、短いのか。赤子が生まれ、三歳になれば、たどたどしい歩みから駆け出し、片言で「ママ。」や「大好き。」を口にするようになる。私の四歳の弟を見ると、その愛おしさが胸に沁みる。一年前、三歳だった弟の小さな足取り、階段を慎重に登る姿、シロツメクサや三つ葉をぎゅっと握る小さな手。つまづいてしまふような走りに、私は歩いて追いつく。その一つ一つが、平和な日々の象徴だ。弟が笑顔で駆け寄ってくるたび、愛と温もりが心を満たす。

だが、もしその三年を戦禍の中で過ごしていたら？弟の小さな足は、逃げる途中でどれほどかしいだろう。親の腕に抱えられた重さは、どれほど切実か。シロツメクサを摘む余裕などなく、銃声

や爆音が日常に響く中、ただ生き延びることが全てになる。弟の無垢な笑顔を思い浮かべるたび、胸が締め付けられる。平和な我が家では想像もできない、恐怖と不安に満ちた日々。愛する子を守るため、親はどんな思いで走るのだろうか。教科書に戦争の話が載るのは、忘れないためだ。しかし、忘れないことは存外難しい。仕事や家庭の雑事に追われる中、遠くの悲劇はつい脇に押しやられる。それでも、弟が私の手を握る温もり、シロツメクサを差し出して、「これ！」と笑う顔を思い出すたび、平和の尊さと戦争の重みが胸に迫る。三年は、子どもが愛らしい笑顔で走り出すには十分な時間だ。だが、戦争の記憶を風化させるには短すぎる。あの戦争が始まった時、誰もが毎日そのことを考えていた。でも今、ただだけの人がウクライナとロシアの現状を気にかけているだろう。薄れゆく関心は、風化の始まりなのだろうか。それとも、ただ日常の忙しさに飲み込まれているだけなのか。ふと、そんな自問が頭をよぎる。戦争の痛みを忘れることは、どこかでその存在を軽んじることにつながるのではない。弟の笑顔が無条件に愛おしいように、遠くの子どもの命も同じ重みを持つはずなのに、なぜこうも心が鈍くなるのだろう。情報過多の時代、毎日のニュースに疲れ、目を背けたくなる瞬間もある。だが、それは戦争の現実から目を逸らすことと、どこかでつながっているのかもしれない。

それでも、希望を捨てたくない。平和な世界では、弟のような子どもたちが無邪気に走り回り、愛する家族と笑い合える。ウクライナやロシアの子どもたちも、いつかそんな日々を取り戻してほしい。先生の言葉を胸に、時折立ち止まり、目を向ける。戦争を忘れず、平和を願いつけるために。あの戦争も、今なお続く争いも、心に留めておきたい。そして、いつか「動物園で赤ちゃんが生まれた」とか、「戦争が終わった」と喜びのニュースが世界を埋め尽くす平和な日を、愛と希望を胸に待ち続けたい。

最優秀賞

叔父の長袖

兵庫県

はせがわ
長谷川 かつ
勝 士

私が七十四歳になった今、ようやく向き合えたことがある。それは、幼い頃から身近にいた被爆者である叔父の想いと、原子爆弾という人類史上最も悲惨な出来事の真実である。

叔父は広島で小さな商店を営んでいた。私は夏休みになると、姫路からよく叔父の店に遊びに行った。叔父はいつも優しく歓迎してくれたが、ほとんど笑わない人だった。暑い盛りでも必ず長袖を着ている叔父を不思議に思っ「暑くないの?」と聞くと、「慣れているから」と言うだけで、やはり笑わなかった。

みんなで楽しく食事をしていても、叔父が心から笑っているようには見えなかった。子どもながらに、叔父の表情の奥に何か深い悲しみのようなものを感じていた。

ある夕方のことだった。

「勝士ちゃん、はよう、お風呂に入りんさい」

叔母に「はい」と返事をし、私は服を脱ぎ出した。

「おじちゃんが今入つとるき」

母は台所から飛んできて、私の腕を掴んで、いやという顔をした。すぐに叔父は風呂から出てきた。叔母は台所から声をかけた。

「あんた、もう、ええの?」「もう、ええよ」

母は私の手を離して、台所に向かった。

その時の叔父の背中が、なぜかとても小さく見えた。しかし、それが何なのか、私には分からなかった。

もう一つ、忘れられない思い出がある。中学生の頃、叔父が広島球場に巨人対広島戦のナイターを観に連れて行ってくれた。華やかな照明に照らされた球場で、叔父は偶然、古い友人と再会した。その方の顔には大きなケロイドがあった。私は目を逸らしてしまった。その時、叔父は静かに「この人もあの日、広島にいたんだよ」と言った。

球場の明るい照明の下で、原爆の現実を目の当たりにした衝撃は、少年だった私の心に深く刻まれた。しかし、その後の私は、その現実から目を背けて生きてきた。

やがて、叔父が入院したという知らせが届いた。そして、間もなく亡くなった。母たちが小声で「原爆や」と話しているのが聞こえた。その時、私は初めて叔父の長袖の理由を理解した。しかし、不思議なことに、私は誰にも原爆について聞かなかった。両親にも、叔母にも、学校の先生にも。なぜか、とても怖かった。

転機は二〇一六年、オバマ大統領の広島訪問だった。現職のアメリカ大統領として初めて被爆地を訪れた歴史的な瞬間を見て、私はようやく重い腰を上げた。七十歳を過ぎてから、初めて広島原爆資料館を訪れたのである。

資料館で見たものは、まさに地獄絵だった。原爆の熱線で溶けた瓦、人の影が焼きついた石段、黒焦げになった弁当箱。そして何より、被爆者の証言の数々。私は涙が止まらなかった。叔父がなぜ肌を隠し続けていたのか、その友人の傷跡の意味が、ようやく心の底から理解できた。

しばらくして、私は永井隆博士の『この子を残して』を読んだ。放射線医学の研究で自らも被爆の影響を受けながら、長崎で被爆者の救護に尽力し、病床にあっても愛と平和を説き続けた博士の生き方に深く感動した。博士の「己の如く人を愛せよ」という言葉は、私の心を強く打った。

この年齢になって気づいたことがある。愛とは、相手の痛みを自分の痛みとして感じることから始まるということだ。叔父が隠し続けた傷の痛み、友人の顔の傷跡の痛み、そして数え切れない被爆者の方々の痛み。それらを真に理解しようとするのが、愛の第一歩なのだと思う。

平和もまた同様である。戦争の悲惨さから目を背けていては、真の平和は築けない。私は半世紀以上も、平和の尊さを口では唱えながら、その土台となる歴史の事実から目を逸らしていた。これは深い反省である。

永井隆博士は、自らの命を削りながらも、愛と平和のメッセージを世界に発信し続けた。博士の生き方を知った今、私は思う。愛と平和は、単なる理想ではなく、一人一人の具体的な行動によって築かれるものだということを。

七十四歳の私にできることは限られている。しかし、叔父から受け継いだ記憶を、次の世代に伝えることはできる。原爆の真実を学び続けることはできる。叔父が生涯隠し続けた想いを、決して忘れることなく。

優秀賞

誤解がつくる壁、理解をひらく窓

宮城県

何^か 琦^き 璠^{はん}

「このチャンコロが」

メーターを始動させると、タクシーの運転手はこのように吐き捨てた。

タクシー乗り場の長い車列に並び、ようやく獲得した乗客。その客の行く先が短距離の移動だと判ると、割に合わない苦勞をしたことへの憤慨は、私が中国人であったことに向けられたのだ。その瞬間、黄ばんだ文献でしか見たことがなかった蔑称が、いまだに使われていることを私は初めて知ったのだ。

日本における中国人蔑視は、日清戦争に始まった。当時の新聞は戦争の理由を正当化するため一斉に「中国の野蛮さ」を報道し、それが根深い差別となつて定着したのである。

そのため日清戦争後、近代技術を学ぶべく中国人留学生が訪れたものの、辮髮姿の中国人は「豚尾漢」と罵られ、この蔑称が現代でも残っていたのだ。蔑称は辞書には載らないので、何世代も語り継がれ、この若い運転手まで受け継がれてきたのだろう。

こうした中国人への蔑視は、当時の両国を戦火の淵へと追い込んで行くこととなったが、このような風雲急を告げる時代、その流れに抗い、反対の声を上げた日本人がいた。それが松本亀次郎という人物である。

彼は明治生まれの日本語学者であり、中国人留学生教育に尽力した人物だ。中国人と長年接してきた彼は、現況の打開のため自分が声をあげなければならないと考えたのだ。

そこで彼は一冊の本を刊行する。それは表向き教育回顧録であったが、その中には特殊な頁を潜ませており、政治家と報道機関に対する願いを書き込んだ。そして検閲を逃れるため市販せず、教育刊行物を装って、日中の外交官、政治家、軍人に直接郵送したのだ。

そのため本書は、古本屋にもなく、一般の図書館にも収蔵されていない。

そこで私は、とある大学附属図書館でその原本を閲覧してみることにした。

職員が取り出した小さな古書。茶褐色に焼けたページの縁を捲つてゆくと、彼が密かに訴えた文面の箇所を見つけ出すことができた。

——政治家へ。政治家の言動は日中親善に及ぼす影響は甚大だ。だから不用意な発言で中国に悪い印象を与える言動は、くれぐれも謹んでほしい。

——報道機関へ。新聞記事には、中国人を馬鹿にするものがよく見られる。どうか日中が仲良く付き合うためにも慎んでほしい。他国に対する敬意と理解をもつてほしい。

全五百頁の中で、これらの文面は二頁に過ぎない。だがこのような声を挙げるには、どれほど勇気のいる行動であっただろうか。実際、それが問題となり校長職を追われ、彼は死ぬまで特高警察の監視下に置かれたのだ。

彼の魂の叫びを目にすると、熱いものが込み上げてくる。彼が伝えたかったのは、国境を越え、人間として互いに尊重し合うことの

大切さだ。それこそが、彼にとつての「愛」であり「平和」のあり方だった。そして、彼は最後にこう綴っている。

——日中の国民諸君。どうか、お互いに、立場や考えの異なる人を受け入れる心の広さを持つてほしい。

真に成熟した社会とは、違いを排除することではなく、それを理解の糸口とする姿勢の中にこそ芽生える。

だからこそ、日中両国の市民が、互いの違いに耳を塞ぐのではなく、まずそれぞれが受け入れ尊重しよう。それが平和の礎となる。彼はそう考えたに違いない。

彼から日本語を学んだ中国人は、実に二万人に及ぶ。その中には、後に中国の首相となる周恩来もいた。周恩来は晩年、こう語っている。「日本には松本先生のような人もいた。日本に行ってみたい。松本先生のお墓参りもしたい。」その言葉には、若き日に出会った一人の日本人への深い感謝と、時を経ても消えることのない恩返しへの願いが、確かに息づいていた。では彼が半世紀も前に、異国の地で受け取ったものとは何だったのか。それは、単なる語学や知識ではない。相手を人として見つめ、分け隔てなく接した、「愛」そのものだったのではないか。

文化や立場が違っても、拒絶の理由とするのではなく、理解への入口に変えること。

壁ではなく、窓として開き、風通しのよい心で相手に向き合うこと。その小さな一歩こそが、平和に結びつくと、私は信じている。

この姿勢は、長崎で被爆しながらも「愛は憎しみに勝る」と訴え続けた永井隆博士の信念とも響き合う。彼が示した敵をも思いやる深い愛は、松本亀次郎の生き方とも重なる。違いを怖れるのではなく、

受け入れ、尊重し合うこと。争いではなく、理解と共感によつて未来を築こうとすること。それこそが、次の世代へ継承する、愛と平和のかたちなのではないだろうか。そう私は固く信じている。

※本作品において使用されている「チャンコロ」及び「豚尾漢」という言葉は、本作品の文脈を反映するために、作者に確認をしております。

佳作

一分間の黙とう

島根県

小村紀江

昨年、日本被団協がノーベル賞を受賞した。そのため、広島の原爆の日の様子もニュースで多く取り上げられていた。原爆投下時刻の八時十五分の記念公園が映し出されたあるニュース映像の片隅に、川向こうの道路を普通に歩いている人たちが映り込んでいた。学生時代を広島で過ごした私には、違和感のある光景だった。同級生や周りの人たちが平和への思いを熱く語る姿を見てきた私は、今も広島多くの人が黙とうをしているものと思っていた。

昭和五十三年八月六日、大学二年生だった私は、広島の人たちの深い思いを知る経験をした。当時、私は朝のラッシュ時だけ乗車する路面電車の車掌のアルバイトをしていた。六時前から九時過ぎの仕事なので大半は大学生のアルバイトだった。その日の朝も私はアルバイトに行った。その朝は運転手から、原爆投下の時刻になったら、電車を停めて一分間の黙とうをすると伝えられた。広島駅近くの猿猴橋電停で、運転手は電車を止め「まもなく原爆投下時刻の八時十五分です。電車を停めて一分間の黙とうを行います。」とアナウンスした。ラッシュアワーのピークは過ぎていたが、電車にはたくさん乗客が乗っていた。その時刻になるとどこかでサイレンが聞こえ、乗客は目を閉じ黙とうをした。街路樹の蝉の声だけが聞こえる、静かな一分間だった。四十数年を経た今でも、あの時広島の人たち

と一緒に祈ったことは、深く心に残っている。

広島の人には今はどうしているのかを聞いてみると、電車を停めるような状況はないのでは、と言っていた。以前は八月六日は小学校も登校日になっていたが、それも今はなくなり、各家庭で祈ることになっているらしい。実際に各家庭で黙とうをしているかどうかは疑問だ、と友人は嘆いていた。

我が家では母が自宅で仕事をしていたこともあり、夏休みの広島、長崎の原爆投下時刻、終戦記念日の正午の三回、一緒に黙とうをしていた。この時、母は自分が体験した戦争の話をしてくれた。働いていた下関の空襲で、馬や人間の死体が散乱していたのを見た話。広島にいた友人から聞いた、原爆でがれきの下敷きになった人たちが助けることができず、「ごめんね、ごめんね」と泣きながら逃げたという話。娘さんの結婚に影響するのを心配して、被爆者であることを隠している人のことなど、一つ一つの話は今でも覚えている。

昭和の頃には他の家でも、家族で黙とうをしていた気がする。今年再放送をしていたNHKの朝ドラ「カムカムエブリバディ」でも甲子園を見ていた子どもとお父さんが、終戦の日の正午、球場の観客と一緒に黙とうをする場面があった。町を歩いていた人たちが立ち止まって黙とうする場面も描かれていた。私もテレビの甲子園の観客と一緒に黙とうをした記憶がある。子どもにとって、八月の黙とうは、戦争と平和について学ぶ貴重な時間だった。

日本被団協の田中熙巳代表は、ノーベル平和賞受賞式のスピーチで「十年先には直接の被爆体験者としての証言ができるのは数人になるかもしれません」と語っていた。私は昨年、原爆資料館を訪れた時のことを思い出した。資料館を出て、近くにある被爆アオギリ

を見ておこうとその前に立った時、人を感知した自動音声の説明を始めたのだ。以前そこに立って、被爆体験を語っていた沼田鈴子さんの姿は無く、AIの声が淡々と説明してくれた。被爆者の切々たる思いは伝わってこなかった。直接の証言者がいなくなる中、直接その体験を聞いた者が、自分の声で語り継ぐことの意義を痛感した経験だった。

私には子どもや孫はいないが、身近な子どもたちに接する機会があれば、私は八月の黙とうの体験を話している。今は多様な価値観を尊重し、みんなが多忙な時代であることは承知している。しかし、核兵器の使用が現実味を帯びてきている今、平和を祈るわずかな一分間を拒否する理由があるとは思えない。ある被爆者は、「無関心」が一番恐ろしいと話していた。あのニュース映像の片隅に映り込んでいた歩行者に、私が感じたのはその「無関心」への危機感だった。戦争や原爆で理不尽に命を奪われた人たちの無念を思い、平和を祈る一分間は「無関心」の壁を破る糸口になるはずだ。私の「祈り」は、広島の人たちと一緒に祈ったあの夏「過ちは二度と繰り返しません」との「誓い」になった。そして今、母たちの戦争体験を語り継ぐという行動へとつながっている。「祈り」は単なる願いでは終わらないと信じている。

まもなく戦後八十年目の八月を迎える。静かな一分間の黙とうが、平和を目指す人々の連帯へと広がるよう、私は対話を続けていこうと決意している。

佳作

蝉の季節

京都府

永濱美智子

夏は戦争に思いを馳せる季節だ。

これは子どもの頃、母から聞いた話である。

「……小学校の体育館に広島から逃げた人が寝かされてな。死んじゃった人の脂が、人型の脂が床に染みついて取れなかったと」

高学年になり体育館掃除に当たると、雑巾がけをしながら怖いの見たさで染みを探した。建て替えられた体育館にはもちろん痕跡などは残っていなかった。

大田市は地図上では広島の上にある。原子爆弾の恐ろしさ、忌まわしさはテレビや新聞で知っていた。原爆資料館にも何度か足を運んだこともあった。そこで見たものが眼裏に浮かぶ。六年生の私は考えたものだ。

中国山脈を越えて逃げて来たのに、知らん土地で死んじゃった。保育園との間の石碑の下に埋められちゃったのかなあ。ジ、ジ、ジーって鳴くアブラゼミは、熱い、熱いと死んじゃった人の生まれ変わりかもしれない。

長じてからは故郷を離れ、中学校の教師となった。夏の恒例行事である平和学習の際、国語の「碑」などの教材の折りにも、資料館で見たもの、戦争や原爆を描いた資料の一節、母からの話を語ったものだ。中学生に伝えることが役目だと思っていた。締めくくりの

言葉も決まっていた。

「みんなが生まれるずっと前のことやけど、実際にあったことなんやで」

ところが、近年、新聞の紙面が変わってきた。節目節目に戦争、原爆や終戦の記事が第一面全面にいっぱい載っていたのが、いつからか小さな囲み記事に縮小された。関西版だけのことだろうか。

退職する二三年前の七月の授業のことだ。あるクラスで例のごとく母からの話を語っていた。静まりかえった教室に、唐突に女生徒の声が響いた。

「気持ち悪いのでやめてください」

啞然とした。他の生徒は口を半分開けたままだ。寸の間固まった私に、ある男子生徒がしたり顔で言った。

「先生、しゃあないな。昼飯前やし」

前年まではどのクラスでもショックを受けながら聞いていた。終業のチャイムが鳴っても、机に伏したまま泣き止まない男子生徒に驚いたことさえある。

時代のせいかな、学校の雰囲気か、いや私の真剣さが乏しくなったためか、押しつけがましい話し方のせいかな。ともあれ、以降は私の知見を生徒に伝えるのはやめた。

数年前、瓶陵会近畿支部会に出席した。（瓶陵会とは大田高校の同窓会名である）その会場で、創立百周年記念誌編纂時の逸話を聞いた。

お下げの三つ編みを揺らし、リボンなしのセーラー服に紺のもんぺの女生徒が床板をきしませながら廊下を行き来する。額にも首筋にも汗を滴らせ、汗染みができたセーラー服は体に貼り付いている。

うめき声が蟬の声をかき消す。血と膿と汗と男達の体臭、汚物の臭いの中、彼女たちはにわか看護婦を務める。元は勉学の間だった教室の机椅子を外に押し出し、床に大勢の傷病兵を寝かせている。

軍医代わりの衛生兵はいるものの治療器具も薬もほとんどない。彼女たちはうめき声の中に座り、割り箸で患者の蛆を一つずつ取り、助かる見込みのない患者に水を飲ませ、手を握りしめ最期の言葉に耳を傾ける。そして息絶えた兵士を衛生兵とともに持ち上げ、リヤカーに乗せ火葬場へと運ぶ。

脳裏に浮かぶ光景はあながち間違っではないまい。

当時、大田高校は高等女学院であった。戦争末期に広島第一陸軍病院大田分院に指定された。広島から負傷した兵隊さんが汽車で大田駅に到着すると、担架、大八車、リヤカーで大田分院（高等女学校）へ運んだという。

後日調べた資料によれば、八月九日には三百人ほどの被爆兵が運ばれてきた。女生徒も応援の婦人会員もあまりの惨状に声も出なかったという。トラック、大八車、リヤカーで何度も往復したはずだ。汽車を降ろされるなり火葬場へ運ばれた人もいたことだろう。

そんな歴史が大田にもあった。

白い夏服とスカートで友達とにぎやかに笑い合っていた高校時代の夏。あの大田高校に実際にあったことなのだ。

今、網戸の向こうからアブラゼミの大合唱が聞こえている。

もし私が戦時中の女学生だったら、張り詰めた気持ちを維持できず、暑さと臭いに負けて三日も持たずに倒れていただろう。

教師を卒業した私には教え子に伝える術を持たない。だから、こ

うして書き残しておく。
八十年前に実際にあったことなんやで、と。

第35回 島根県雲南市永井隆平和賞 最終選考作品一覧ならびに結果

【小学生低学年の部】

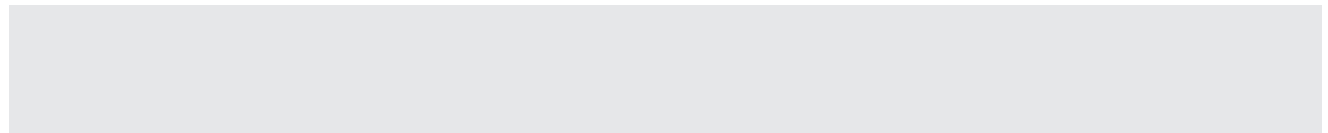
福留沙依	わたしにとっての平和	島根県	雲南市立三刀屋小学校	最優秀賞
若狭 早	心にとどく	愛媛県	愛媛大学教育学部附属小学校	優秀賞
岡田 琉位	ぼくが今できること	島根県	雲南市立三刀屋小学校	佳作
飯塚 陽菜	わたしにできること	島根県	雲南市立鍋山小学校	佳作
影山 生伍	いのちを大せつに	島根県	雲南市立掛合小学校	
福岡 杏三郎	みんなの時間はへいわのための時間	島根県	雲南市立三刀屋小学校	
藤原 由衣	あん心あんぜんのためにできること	島根県	雲南市立三刀屋小学校	

【小学生高学年の部】

浦野 恵奈	青空を見上げて	東京都	星美学園小学校	最優秀賞
堀江 将輝	ぼくの責任	島根県	雲南市立田井小学校	優秀賞
米原 あさひ	ふうちゃん	島根県	雲南市立大東小学校	佳作
足立 新太	戦争をなくすために	島根県	雲南市立海潮小学校	
友塚 大翔	未来	島根県	雲南市立寺領小学校	
西川 晃史	永井隆博士とあの子が教えてくれたこと	長崎県	長崎市立山里小学校	
福島 来実	当たり前じゃないこと	島根県	雲南市立大東小学校	
三ツ國 杏	戦争のない世界へ	島根県	雲南市立海潮小学校	

【中学生の部】

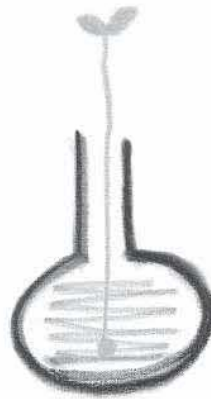
村島 心月	好きなことのできる幸せ	沖縄県	糸満市立兼城中学校	最優秀賞
藤原 和奏	語り継げ、青の記憶。	島根県	島根大学教育学部附属義務教育学校	優秀賞
千葉 結莉	平和への架け橋	沖縄県	糸満市立三和中学校	佳作
高倉 未羽	Tくんに出会って変わった心	島根県	島根大学教育学部附属義務教育学校	佳作
嘉手苺 さほ	その「声」を未来へ残そう	沖縄県	豊見城市立豊見城中学校	
島尻 紗史	平和への第一歩	沖縄県	豊見城市立豊見城中学校	



白保花稀				人々のぬくもりを			
長嶺芽生				自分の足元を見つめて			
安仁屋瑛翔				未来のために			
【高校生の部】							
黒木大誠	証	東京都	東京大学教育学部附属中等教育学校	最優秀賞			
小西琉偉	問い続けた先に	滋賀県	ヴォーリズ学園近江兄弟社高等学校	優秀賞			
田村祐希	命どう宝。	山梨県	山梨県立甲府第一高等学校	佳作			
安慶田翔子	ちかいのことは	沖縄県	沖縄県立那覇高等学校	佳作			
亀尾美月	思いをツナグ	島根県	島根県立出雲高等学校	佳作			
千田立煌	三年の無関心	青森県	青森山田高等学校広域通信制課程	佳作			
藤原沙亜耶	「平和とは当たり前なのだろうか。」	島根県	島根県立三刀屋高等学校				
松田唯花	優しさと思いやり	島根県	島根県立三刀屋高等学校				
山中春奈	戦後八十年を生きる私たち	島根県	島根県立三刀屋高等学校				
【一般の部】							
長谷川勝士	叔父の長袖	兵庫県		最優秀賞			
何琦璠	誤解がつくる壁、理解をひらく窓	宮城県		優秀賞			
小村紀江	一分間の黙とう	島根県		佳作			
永濱美智子	蝉の季節	京都府		佳作			
金城七瑠	戦後八十年　―消えない戦争―	沖縄県					
鈴木大輔	ここにいてほしい	鹿児島県					
野口秋津	先生、博士のバラがあった！	東京都					
林晃弘	隣の誰かの哀しみに寄り添う事―愛と平和を希求して―	兵庫県					
原若菜	心と心のつながりと未来	三重県					
矢田寛子	平和のバトンをつないでいこう	和歌山県					
吉田莉恩	愛と平和の狭間で	東京都					



NO



YES

KU
2007. 8. 26